

職場の構内にある「日時計広場」では、大きく枝を広げたミズキが季節ごとの変化を見せてくれます。高台に植えられているため、樹冠がちょうど目の高さとなり、花や果実を間近に観察できるのが大きな魅力です。写真では、丸い果実が緑色から赤紫色、そして黒紫色へと少しずつ色づき始めています。同じ果房の中でも熟し具合が異なる様子がよく分かり、まさに成熟の途中であることを物語っています。ミズキ (*Cornus controversa*) はミズキ科ミズキ属の落葉高木で、春には枝いっぱいに白い小花を咲かせ、夏から秋にかけてこのような果実を実らせます。和名は、春先に枝を切ると樹液が水のように滴ることに由来するとされています。

果実はやがて黒紫色に熟すと糖分や脂質を含み、多くの野鳥にとって貴重な食料となります。この日も、ムクドリの子が次々と枝に飛来し、熟した実を器用についばんでいました。ムクドリは果実を丸飲みし、消化されなかった種子を離れた場所へ運ぶため、ミズキは鳥の力を利用して子孫を広げています。このような「鳥散布」は自然界ではごく普通に見られる戦略ですが、実際に野鳥が果実を食べる場面を観察すると、植物と動物が互いに深く関わりながら生きていることを実感できます。ヒヨドリやカケス、オナガなどもミズキの果実を好みますが、群れで訪れて短時間に多くの実を食べるムクドリの姿は、この季節ならではの風景です。

ミズキは水平に何段にも枝を広げる独特の樹形でも知られ、遠くからでも見分けやすい樹木です。一方で、このように目線の高さから果実の色づきや野鳥の採食行動まで観察できる機会は意外に多くありません。緑から紫、そして黒へと変化する果実の色は、熟度の違いを一目で示す自然の教材であり、その変化を追うだけでも植物の生活史への理解が深まります。さらに、実を食べる鳥と種子散布との関係まで観察できることから、この場所は植物と動物のつながりを学ぶ絶好のフィールドとなっています。

(2026 年 7 月上旬／文京区お茶の水女子大学構内)

